

氏名（本籍）	飯島 聡史（東京都）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	甲第19号
学位授与年月日	令和5年3月18日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項
学位論文題目	F. F. ショパンのテンポ・ルバート —ノクターンの書法からみたその特徴—

#### 学位論文等審査委員

(総合審査)	委員長	准教授	中田 朱美
		教授	河原 忠之
		教授	近藤 伸子
		教授	古川 聡
		准教授	沢田 千秋
(演奏審査)	委員長	准教授	中田 朱美
		教授	江澤 聖子
		教授	河原 忠之
		教授	近藤 伸子
			若林 顕（本学招聘教授）
(論文審査)	委員長	准教授	中田 朱美
		教授	近藤 伸子
		教授	古川 聡
		准教授	沢田 千秋
			上田 泰史（京都大学大学院准教授）

#### 審査結果の要旨

##### 審査所見

学位審査委員会は、申請者である飯島聡史（博士後期課程器楽研究領域 [ピアノ]）の学位申請論文等に関して厳正な審査を行った。以下に、1. 演奏審査、2. 論文審査、3. 総合審査に関する所見概要および審査結果を記す。

##### 1. 演奏審査

演奏審査は2023年2月20日、国立音楽大学講堂小ホールにて、下記の曲目からなるリサイタルを対象として行われた。

W. A. モーツァルト	Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
ロンド イ短調 K. 511	Rondo in A minor, K. 511
F. F. ショパン	Fryderyk Franciszek Chopin (1810-49)
ノクターン 嬰ハ短調 WN 37	Nocturne in C sharp minor, WN 37

2つのノクターン 作品 27	1. 嬰ハ短調 2. 変ニ長調	
		2 Nocturnes Op. 27, 1. C sharp minor, 2. D flat major
2つのノクターン 作品 62	1. ロ長調 2. ホ長調	
		2 Nocturnes Op. 62, 1. B major, 2. E major
舟唄 嬰へ長調 作品 60		Barcarolle in F sharp major, Op. 60
子守歌 変ニ長調 作品 57		Berceuse in D flat major, Op. 57
バラード へ短調 作品 52		Ballade in F minor, Op. 52

申請者はショパンのノクターンにおけるテンポ・ルバートを研究テーマに掲げ、後述する博士論文では、この作曲家のノクターンにおいて記譜されたテンポ・ルバートを前期ルバート（一定のテンポが保たれた伴奏の上で旋律を変化させる方法）と後期ルバート（音楽構造全体のテンポを変化させる方法）に大別し、それぞれの書法的特徴を検証した。本プログラムはこの博士論文の研究結果と密接に関連づけられている。まず前半では、前期ルバートの顕著な例として W. A. モーツァルトのロンド K. 511 を取り上げた後、ショパンの作品より、前期ルバートが色濃く認められるノクターン WN 37 と 2つのノクターン Op. 27、ルバートの使用が少なくなる晩年の 2つのノクターン Op. 62 を取り上げた。後半では、後期の作品であるものの前期・後期ルバートの両面が認められる舟歌 Op. 60、前期ルバートの特徴が認められる子守歌 Op. 57、ルバートの域を超えて強いドラマ性が表出するバラード Op. 52 が演奏された。全体的に非常に緻密かつ繊細な音運びで、申請者の目指そうとする世界が顕現していた。モーツァルトは声部分けの表現が美しく、ショパン作品はいずれも作曲家への強い共感が高く評された。

一方で、額縁の絵を眺めているかのように平板でおとなしい印象であったなど、より強いダイナミズムを求める指摘も寄せられた。ルバートには内的な質感やエネルギーの増加も求められるが、申請者の今回の演奏はそうしたコントラストが希薄に映った。このほか今後の課題として、多彩な音色、大きなフレーズにおける深い呼吸感、WN 37 や Op. 27-1 などにおける中間部の個性の獲得、ペダルに頼らない弾き方、フレーズの重点や楽曲全体における山場の構築、ショパンのもつスケールの大きさを表現するために楽器やホールをもっと鳴らす演奏法、奥行き・立体感のある音作りといった点が挙げられた。

こうした改善点が見られたものの、今回の演奏はいずれの曲にも高い水準と演奏者の独自の個性が認められ、博士の学位に相応しいものと評された。

## 2. 論文審査

申請者の提出論文「F. F. ショパンのテンポ・ルバート：ノクターンの書法から見たその特徴」は、ショパンのノクターンにおいて記譜されたテンポ・ルバートを、Richard Hudson (2004) で示された「前期ルバート」、「後期ルバート」という分類にもとづいて検証し、それぞれの時期に認められる書法的特徴の変遷をたどるものである。テンポ・ルバートはショパン作品や作曲家の重要な特徴であり、演奏実践とも深くかかわるにも関わらず、体系的に説明されることは稀であるため、一つの視点から俯瞰した本研究はルバート解釈の可能性を広げている。

しかしながら全体的に、依拠した Hudson (2004)、Eigeldinger (2020)、Smendzianka (2009) といった主要文献を典拠に遡って批判的に読む姿勢が不足していた。またショパンがテンポ・ルバートにかかわる演奏実践上の指示をいかに詳細に譜面上に記譜していたとしても、実際に個々の箇所での程度のテンポの揺れを想定していたかという点は解明できないため、書法的特徴とシ

ョパン自身の演奏実践を重ねて捉えることには限界がある。さらに同時代作曲家の作品にも一部言及しているものの、テンポ・ルバートの演奏習慣のなかでショパンの特異性を捉えるためには、当時の理論書をはじめとするより広範な言説研究も必要である。

とはいえ楽譜自体を対象として論証的に整理しようとする試みや着眼点は独創的であり、今後、ショパン作品の演奏解釈においても有用なものとなることが期待できる。

### 3. 総合審査

演奏審査では修了リサイタルの構成や表現力に学術研究との連関が認められ、高い評価が示された。論文審査においては上記のとおり問題点が認められたが、申請者は査読つき紀要論文を継続的に投稿しているほか、TA や学外における教育経験、モダンピアノだけでなくピリオド楽器による演奏活動も堅実に重ねている。これらを総合すると、本学大学院博士後期課程のディプロマ・ポリシーの条件に該当すると判断できることから、「博士（音楽） Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに相応しいものと判定した。